

## 資料 66.2019 年 8 月「長田敏氏と伝える会のメール交換」

2019.08 長田敏氏と伝える会のメール交換

2019.08.06 付 水野高司→長田敏様宛

長田敏様、

「石岡繁雄の志を伝える会」の水野です。大変ご無沙汰しております。猛暑の中、長田様にはお変わりなくご活躍のことと存じます。

さて、標記の件、当会の所有しております「ミニ実験機」を再構成して、「湯浅本 177 頁」に掲載の実験と ほぼ同一条件で 0.74mmΦのナイロン製テグスの切断実験を実施してみました。

その結果判ったことは以下の通りです（実験の詳細は添付資料をご参照ください）；

- ① 荷重 3.2Kg まではテグスは切断しない
- ② 荷重 3.3Kg でテグスは確保者側で切断する
- ③ 荷重 3.4Kg 以上ではテグスは墜落者側で切断する
- ④ テグスが切断する刃角の位置も微妙であり、本実験ではわずか 0.1Kg の荷重差で位置が変動し、切れ端の形状も大きく異なる。
- ⑤ 従って全て「全て確保者側で切断」とは結論付けられない。

一方、「湯浅本 175 頁」には **12Kg では切断せずに、13Kg で全て確保者側で切断**と報告されています。

この結果、湯浅実験が如何にいい加減なものか容易に想定されます。そのうえ湯浅氏が主張する東壁遭難事故の総括が、この誤った実験結果により導き出された可能性があり、私たちは看過できません。

「湯浅本 243 頁」には「NITE の長田敏の論文を見つけた。それで長田に会って、2 点支点を有する岩角でのナイロンザイル切断実験を指導してもらった。その結果、2 点支点を有する岩角で登攀者が墜落すると、確保者側でナイロンザイルが切断することが判明し、ナイロンザイルについての検証が終了した。**これでやっと東壁遭難の登攀についての総括が完結し**

た」と明記されています。

更に、「同 245 頁」には、「2つの支点を持つ岩角のどちら側でナイロンザイルは切断するのかの実験についてご指導いただきました NITE の長田敏氏に深謝いたします」と賛辞が贈られております。

そこで下記についてどうしても長田様のご見解をお聞きしたいと存じます。大変お世話になった NITE 様に今後ご迷惑が及ばないことを念ずるが故、失礼とは存じますが宜しくお願いいたします。(湯浅氏は本の中で、「吊り上げ」が石原氏によって行われた結果、五郎氏はバランスを崩して足を滑らせ、その結果墜死した、と示唆しています。つまり石原氏の行為は過失致死事件であり、石岡先生はそれを知りながら隠蔽したとも書いています。これは 2 人に対する重大な名誉棄損であります。このまま放置すれば万一、法廷闘争となった場合、実験を指導し、誤った結論を導き出させた NITE 様もしくは長田様の責任は免れないと危惧いたします)

長田様にお尋ねしたきこと；

- ① 長田様は「湯浅本は全部読んでいない」とおっしゃっていましたが、上記の記載事項はお読みになりましたでしょうか？
- ② 上記湯浅実験とその結果について NITE 様もしくは長田様はどこまでコミットされているのでしょうか？
- ③ ナイロン製テグスとナイロンロープでは切断のメカニズムも挙動もかなり異なることを、私たちの実験では確認しておりますが、どのような根拠でテグス実験を勧められたのでしょうか？
- ④ 「湯浅本 175 頁」後ろ 2 行に「水玉形状（チューリップ形成）が見られた」と記載ありますが、その確認は NITE（長田様）がされたのか、湯浅氏の独断なののでしょうか？
- ⑤ 弊会の実験結果から言えることは、湯浅実験の錘は過剰で、実験用の岩角がいい加減であると推定されること。切断に必要な荷重を大幅に超過する錘で切断して、ナイロン特有の熔融時のチューリップ模様を無理に作ったのでは？と推定されますが、長田

様はどのように評価されますでしょうか？

- ⑥ 6月18日のお電話でのお願いの際、長田様より「湯浅氏とは穏やかに、諭すように話し合いをしてください。どうしても湯浅氏が話し合いに乗らない場合は私から湯浅氏に手紙を出してもよい」とご返事いただきました。湯浅氏はまるで「実験は長田様のご指導で行った」かの印象を与える記載をしていますが、「記述内容は虚偽である」等、湯浅氏に本の内容について抗議の申入れをされているうお気持ちはおありでしょうか？

長々と述べさせていただきましたが、何卒宜しくお願い申し上げます。

水野高司 拝（「石岡繁雄の志を伝える会」、[Tel:090-1099-0995](tel:090-1099-0995)）

08.07 長田敏様→水野高司宛

石岡繁雄の志を伝える会

水野高司 様

大変ご無沙汰いたしております。

水野様たちが行われた実験、湯浅氏の本記載事項、水野様のご質問につきまして、ご意見、感じたこと等につきましてご連絡させていただきます。

1. ①荷重 3.2Kg まではテグスは切断しない ②荷重 3.3Kg でテグスは確保者側で切断する ③荷重 3.4Kg 以上ではテグスは墜落者側で切断する
- ④ テグスが切断する刃角の位置も微妙であり、本実験ではわずか 0.1Kg の荷重差で位置が変動し、切れ端の形状も大きく異なる。
- ⑤ 従って全て「全て確保者側で切断」とは結論付けられない。

さて、標記の件、当会の所有しております「ミニ実験機」を再構成して、「湯浅本 177 頁」に掲載の実験と ほぼ同一条件で 0.74mmΦ のナイロン製テグスの切断実験を実施してみました。

その結果判ったことは以下の通りです（実験の詳細は添付資料をご参照ください）；

一方、「湯浅本 175 頁」には **12Kg では切断せずに、13Kg で全て確保者側で切断**と報告されています。

この結果、湯浅実験が如何にいい加減なものか容易に想定されます。そのうえ湯浅氏が主張する東壁遭難事故の総括が、

この誤った実験結果により導き出された可能性があり、私たちは看過できません。

→ ・荷重 3.2Kg では何回実験を行ってもテグスは切断しない、荷重 3.3Kg では何回実験を行ってもテグスは確保者側で切断する、

荷重 3.4Kg 以上では何回実験を行ってもテグスは墜落者側で切断する 荷重の違いによって同じ結果になると考えてよいでしょうか。

・0.74mmΦのテグスではなく、テグスと同程度の太さになるように調整したナイロンザイルのフィラメント数本で

同様の実験を行った場合は、どのような結果になるでしょうか。

・0.74mmΦのテグスではなく、テグスと同程度の太さになるように調整した麻ザイルの紐で同様の実験を行った場合は、

どのような結果になるでしょうか。

・湯浅氏の実験では、荷重 12Kg、13Kg で実験を行っておられるようですが、水野様たちが行われた実験の

荷重 3.2Kg、3.3Kg、3.4Kg となった理由ですが、おそらく、水野様たちの実験機の方が、岩角想定した金属の角が鋭かったのでは

ないかと思います。湯浅氏の実験機では、荷重 3.2Kg、3.3Kg、3.4Kg ぐらいでは切断せず、荷重 12Kg、13Kg にしないと

切断しなかったのではないかと思います。なお、荷重が大きい方が、衝撃荷重による発熱量は大きくなると考えられます。

2. 「湯浅本 243 頁」には「NITE の長田敏の論文を見つけた。それで長田に会って、2 点支点を有する岩角でのナイロンザイル切断実験を

指導してもらった。その結果、2点支点を有する岩角で登攀者が墜落すると、確保者側でナイロンザイルが切断することが判明し、

ナイロンザイルについての検証が終了した。**これでやっと東壁遭難の登攀についての総括が完結した**」と明記されています。

更に、「同 245 頁」には、「2つの支点を持つ岩角のどちら側でナイロンザイルは切断するのかの実験についてご指導いただきました

NITE の長田敏氏に深謝いたします」と賛辞が贈られております。そこで下記についてどうしても長田様のご見解をお聞きしたいと存じます。

大変お世話になった NITE 様に今後ご迷惑が及ばないことを念ずるが故、失礼とは存じますが宜しく願いいたします。

（湯浅氏は本の中で、「吊り上げ」が石原氏によって行われた結果、五郎氏はバランスを崩して足を滑らせ、その結果墜死した、

と示唆しています。つまり石原氏の行為は過失致死事件であり、石岡先生はそれを知りながら隠蔽したとも書いています。

これは2人に対する重大な名誉棄損であります。このまま放置すれば万一、法廷闘争となった場合、実験を指導し、誤った結論を導き

出させた NITE 様もしくは長田様の責任は免れないと危惧いたします)

→ ・「NITE の長田敏の論文」とは、2014 年 10 月 3 日に開催された「あいちサイエンスフェスティバル 2014」説明に使用した

「製品事故の原因を探るサイエンス」(<https://www.shigeoishioka.com/new39.html>) の PPT の資料だと思えます。

・湯浅氏がコスモスクエアの NITE に奥様と訪ねてこられ、「2点支点を有する岩角でナイロンザイルはどちらで切れるか？」との

質問をされましたので、「2点支点を有する岩角を想定した実験機を作り、実験をやったらどうか。ナイロンザイルのフィラメント数本で

実験を繰り返したらよいのでは。」と回答しました。

・湯浅氏に対して「昭和30年1月に事故が起こった理由は、日本ではナイロンザイルは麻

ザイルよりも何倍も強く、ナイロンザイルは切れないと信じていたからである。」「石岡繁雄先生は松の木による実験を行い、鋭いエッジの岩角で弱いことを発見された。これはすばらしいことである。」

「石岡繁雄の志を伝える会メンバー」とは、仲良くやっってください言いましたところ、それ以降、私に相談には来られなくなりました。

### 3. 長田様にお尋ねしたきこと；

- ① 長田様は「湯浅本は全部読んでいない」とおっしゃっていましたが、上記の記載事項はお読みになりましたでしょうか？

→ P243「NITEの長田敏の論文を見つけた・・・」P245「二つの支点を持つ岩角のどちら側でナイロンザイルは切断するかの実験について・・・」

P249「長田敏 「あいちサイエンスフェスティバル 2014」の講演レジメ・・・」あたりを読みました。

- ② 上記湯浅実験とその結果について NITE 様もしくは長田様はどこまでコミットされているのでしょうか？

→ 「2点支点を有する岩角を想定した実験機を作り、実験をやったらどうか。ナイロンザイルのフィラメント数本で

実験を繰り返したらよいのでは。」「昭和30年1月に事故が起こった理由は、日本ではナイロンザイルは麻ザイルよりも何倍も強く、ナイロンザイルは切れないと信じていたからである。」「石岡繁雄先生は松の木による実験を行い、鋭いエッジの岩角で弱いことを発見された。これはすばらしいことである。」

「消安法の特定製品に登山用ロープが追加され、それ以降、岩角によるナイロンザイルの事故はほとんど発生していない。」と説明しました。

- ③ ナイロン製テグスとナイロンロープでは切断のメカニズムも挙動もかなり異なることを、私たちの実験では確認しておりますが、どのような根拠でテグス実験を勧められたのでしょうか？

→「テグス実験」ではなく、「ナイロンザイルのフィラメント数本で実験をやったらどうか」と説明しました。

- ④ 「湯浅本 175 頁」後ろ 2 行に「水玉形状（チューリップ形成）が見られた」と記載ありますが、その確認は NITE（長田様）がされたのか、湯浅氏の独断なののでしょうか？

→ 私は、水玉形状（チューリップ形成）の確認はしておりません。

湯浅氏は「製品事故の原因を探るサイエンス」  
(<https://www.shigeoishioka.com/new39.html>) の P58 を見ているので、ご自分で確認されたものと思います。

「石岡繁雄の志を伝える会メンバー」とは、仲良くやっってください言いましたところ、それ以降、私に相談には来られなくなりました。

- ⑤ 弊会の実験結果から言えることは、湯浅実験の錘は過剰で、実験用の岩角がいい加減であると推定されること。切断に必要な荷重を大幅に超過する錘で切断して、ナイロン特有の溶融時のチューリップ模様を無理に作ったのでは？と推定されますが、長田様はどのように評価されますでしょうか？

→ 荷重 12Kg、13Kg であれば、衝撃荷重による発熱量は大きくなると考えられますので、水玉形状（チューリップ形成）ができるのではないかと思います。

- ⑥ 6 月 18 日のお電話でのお願いの際、長田様より「湯浅氏とは穏やかに、諭すように話し合いをしてください。どうしても湯浅氏が話し合いに乗らない場合は私から湯浅氏に手紙を出してもよい」とご返事いただきました。湯浅氏はまるで「実験は長田様のご指導で行った」かの印象を与える記載をしていますが、「記述内容は虚偽である」等、湯浅氏に本の内容について抗議の申入れをされているうお気持ちはおありでしょうか？

→ 先日（8 / 6）、電話で、石岡あずみ様、水野様に説明させていただきましたが、湯浅氏の気持ちは、大きなニュースにして、「ナイロンザイル事件」の真実をひっくり返そうとしているように感じます。「石岡繁雄の志を伝える会メンバー」が抗議、訴訟などしないで、「氷壁・ナイロンザイル事件の真実」をベースにした社会のためのセミナーなどをしたらよいと思います。セミナーなどでは、次のコメントを発したらよいと思います。

・昭和30年1月に事故が起こった理由は、日本ではナイロンザイルは麻ザイルよりも何倍も強く、ナイロンザイルは切れないと信じていたからである。

・石岡繁雄先生は松の木による実験を行い、鋭いエッジの岩角で弱いことを発見された。

・石岡繁雄先生の功績で、消安法の特定製品に登山用ロープが追加され、それ以降、岩角によるナイロンザイルの事故はほとんど発生していない。

水野様たちが今後行われる実験で、ナイロンザイルは、何故、岩角で切れやすいのか、説明資料を作成し、必要とされる方がおられたら配布したらどうかと思います。

今後とも、よろしく願いいたします。

何とぞ、よろしく願いいたします。

-----  
独立行政法人 製品評価技術基盤機構

製品安全センター 製品安全技術課

検査業務室

長 田 敏

08.08 石岡あづみ→長田敏様宛

長田 敏さま

昨日はお忙しい中お電話いただきまして、ありがとうございました。

お電話の後來客があり、途中でお話を遮ってしまいましたことをお詫び申し上げます。

昨日のお話の中で、長田さまが湯浅氏の本出版の経緯とこれまでの経緯をご存知でないためと、湯浅氏の本を読んでみえないため（無関係の方は読むに堪えない本ですから、お読みになる必要もないと思いますが、関係者は読んで内容を確認すべきと存じます）、誤解を生じていることを感じましたので、以下重要部分のみ簡潔に記させていただきます。



## A. 出版までの経緯と、出版後の経緯

1. 岩稜会会員で古参の高井氏は、前穂高岳東壁遭難当時名アルピニストとしての途上であった。前穂高岳東壁で岩稜会の石原國利氏をリーダーとする3人パーティが遭難を起こしたため、岩稜会がナイロンザイル事件に特化して、国内外の山々の初登攀などを目指さなくなったことに不満を持っていた。そこで事故を起こした石原氏を恨み、ナイロンザイル事件に会の活動を特化した父を恨みに思った。特に父が東壁遭難についての岩稜会としての総括をしなかったと、長年父に非難を重ねていた。父はどう非難されようが、ナイロンザイル事件と闘う他に取るべき道はなかった。

2. 2006年8月15日父死去

3. 高井氏の話聞いて同調した湯浅氏（昭和34年岩稜会入会で遭難当時のことは、全く判っていないが、明神岳の小峰の冬期初登攀に連れて行ってくれた高井氏を尊敬していた）は、2011年11月に『前穂高岳東壁遭難50年目の検証』と言う38頁の冊子を作成（内容は今回の本と同様で、ポイントだけが記してあった）した。

2012年2月9日、石原氏、澤田氏、高井氏、湯浅氏でその内容に付いての会談が持たれた。遭難当事者の石原氏、澤田氏に冊子を見せて岩稜会としての検証としたいと言う事を話され、意見を聞いた。澤田氏は独断と偏見で書かれた内容に付いて激怒された。湯浅氏は「冊子の公表はしない。全て破棄するのでお返し願いたい」と言われ一件落着となった。（この会談の持たれた日、事前に澤田氏は拙宅にお立寄りになり、私に仔細を話された。私は冊子を借りてコピーを取らせていただいた。私に関しても今回の本と同様実名で虚偽の記載があり、その部分について<2012.2.11 湯浅氏の検証に対する反論>としてメモに残し、湯浅氏にも話した）

4. 2016年4月23日高井氏死去

5. 2019年4月、今回の本を出版

6. 5月中旬、突然に本を配布され、送られた関係者はビックリすると共に遺憾に思った。

7. 6月2日、伊勢新聞に湯浅氏の本について掲載（新聞を添付いたします）

8. 6月4日、「石岡繁雄の志を伝える会」は、顧問の石原國利氏を含む会員と共に、湯

## 浅氏の本についての対応会議

9. 6月8日、長田さまに電話し、長田さまに関する部分について事情をお聞きする

10. 6月8日～7月5日、湯浅氏の本に関する反論まとめ（この本に関して質問を受けた場合、即座に返答できるようにするため。但し湯浅実験に関しては検証実験をした後とする）

11. 6月18日、伊勢新聞に記事が出ていることを知り、「伝える会」で新聞各社に電話して、本の不当性を訴え記事にしないように要求。

○各社とも湯浅氏の本に関する「検証・反論」を文書にして速やかに送って欲しいとのこと。

○中日新聞津支局デスクによると、名古屋本社記者が湯浅に面会取材し、記事準備中だったが、不審な点あり保留にしたばかりだった。事情を聞き納得した。記事は出さないと話される。

12. 6月21日、湯浅氏の本に関する「検証・反論」の文書を各新聞社宛発送。公共の機関、湯浅氏が本作成のために指導を願ったという京都大学教授（この方からは湯浅氏・相田氏・私、連名宛のメールがあった。相田氏と私も本の出版と内容に付いて、当然知っていると誤解されていた）、鈴鹿市の著名人からも問い合わせがあったため、同内容の文書をHPのトップページにも掲載する。

13. 7月2日、第一回湯浅氏宛書簡発送（長田さまからご指導を受けたように穏便に面談をするため、面会を求める）

14. 7月4日、ミニ実験装置での湯浅氏本 P177 の検証実験一回目

14. 7月8日、第一回湯浅氏からの返信（面談拒否、質問は文書にて受付）

15. 7月12日、第二回湯浅氏宛書簡発送（質問事項：①なぜ本を出されたかの真意、②配布先の公開）

16. 7月19日、第二回湯浅氏からの返信（①の返答：日本山岳史に明記しておくため、②回答はしない）

17. 7月25日、第三回湯浅氏宛書簡発送（①実名で本に記載のある人物に対して、なぜ出版前に真偽のほどを確かめ、掲載の許可を得なかったか、②湯浅氏本の中であづみに関わりのある部分で、間違いを指摘し、なぜ間違いを記載したかについて質問）

18. 7月29日、ミニ実験装置での湯浅氏本 P177 の検証実験二回目

19. 7月31日、ミニ実験装置での湯浅氏本 P177 の検証実験三回目

20. 同日、第三回湯浅氏からの返信（①出版や発言の自由は認められているので、許可を得る必要はない、②石原氏、澤田氏は内容に付いて意見や具体的な反論、異議を述べなかった。あづみにも具体的な間違い指摘を受けたことはない）

B. 長田さまが強調されている、父のナイロンザイルについての功績は、湯浅氏の本にも記載があります。そのことと、今回の本の内容は別だと記されています。要するには遭難の総括をすることは登山界にとって有意義であると言われる訳です。

C. ミニ実験装置の検証実験について：水野さんからのメールをご参照ください。

ご存知のように、湯浅氏の本に実名で登場する健在の人物（石原國利氏・澤田榮介氏・相田武男氏・あづみ）は、この本の発行で多大な迷惑を受けています。そのことを遺憾に思っていることを伝えても、「内容に付いて抗議を受けなかったので、相談なく掲載した」と記しています。

同様に実名で登場する NITE と長田さまも、テグスでの実験を勧めた訳ではないのに、湯浅氏の本にはあたかも長田さまがお薦めになった通りの実験をしたように書かれています。

長田さまは、「この本は読まれていないし、売れていないので、スキャンダラスに騒いで新聞ざたになったりした場合に、逆にこのことを広めることになるので、止めた方が良い」と言われましたが、このまま捨てておくと、何年かしてどこかの新聞社なりが発表して再燃した場合、湯浅氏は私に対する返信と同様に「登場人物には本を送ってあるが、全く反論が無かったので、この本に書かれていることは全て真実である」と言われると思います。その時に、NITE と長田さまが不利にならないようにと思い、水野さんは長田さまにメールをされた訳です。

今、長田さまが湯浅氏に「私はあなたにナイロンザイルの細いフィラメント数本で実験をしたらどうか、とお話しただけである。結果についても NITE として検証した訳ではない。

全て私の指示による実験だったように思われる記載は遺憾である」と言う事を言明されておけば、後々非難を浴びることもないので、良いと思ったからです。

長々と記しましたことをお詫びいたします。

今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

石岡 あづみ拝

08.08 水野高司→長田敏様

長田 敏様、

ご多忙のところ、ご丁寧な下記ご返信、誠にありがとうございました。

先ず私共の「ミニ実験機」について触れさせていただきます。2013年の名古屋大学・2014年の上高地での展示会での反省から、「蒲郡公開実験」のごまかしを判り易く説明するものが欲しいとの思いから、以後の展示会では「ミニ実験機」を作製・展示・実演することにしました。リアリティを出すために石岡先生が実際にせん断実験で使用し、その後、消安法の特定製品の「せん断衝撃試験」の「支点の形状」（1991年3月19日の官報）で採用されたSUS304製の刃をそのまま使用（面取り有無各1本設置）しました。本体は分解・移動が容易で、子供連れ家族も安心して参加できる構造とし、荷重も判り易い1Lt(1Kg)のペットボトルとし、ナイロンザイルは幾種類かを試した後、3Φの3つ撚りナイロンロープを採用しました。その後の鈴鹿高専・松本山岳フォーラム・第2回目上高地展示会では述べ約1万人の入場者に対して約千本の切断実験（落下距離690mm）を実施しました。目に見えないくらい僅かな面取り（0.5c）のある方では切れず、無い方では瞬時に切断する様を体験した見学者は一様にアツと驚くと共に、「篠田のごまかし」を直ちに理解してくれました。それでも鈴鹿や松本では実験後のメンテが不十分だと切れないケースも発生し、これではロングランの上高地では混乱が生じる恐れがあったため、刃は同サイズながら鋼鉄製とし、4角面に焼き入れを施したものに變更し、なんとか65日間の上高地展示会を乗り切ることがで

きました。SUS304 製の刃は不銹鋼であり、柔らかいため摩耗しやすく、制定後もその的確性が専門家から指摘されましたが、法改正はされませんでしたことを付記します。

私は「湯浅本」で「湯浅実験」を読んで直ちに「**12Kg では切断せずに、13Kg で全て確保者側で 切断**」との記載に違和感を覚え、7月4日に「ミニ実験機」をそのまま使用して、テグス 20 号(0.74Φ)と 3Φの 3 つ撚りナイロンロープによる各種予備実験をしてみました。一番シンプルな 690mm の自由落下せん断試験では、下記結果を得て、湯浅実験の異常さを確信しました。

- ・テグス 0.74mmΦは、590 mmの自由落下の場合、荷重 0.5Kg では切断せず、0.55kg 以上で切断した。

- ・ナイロンロープ 3 つ撚り 3mmΦは、590 mmの自由落下の場合、荷重 0.8Kg では切断せず、1kg で切断した。

その後 7 月 29 日に「ミニ実験機」を石岡高所安全研究所内の作業机上に設置して嵩上げし、「湯浅実験」の 2 支点を有する振り子落下によるせん断試験の条件でテグス切断の各種実験をし、荷重 100g 単位で切断の有無と、刃のどちらで切れるかが変化することを確認しました。この時は動画は撮っていましたが、切れる瞬間の静止画を得られず、31 日に実験者の数も増やして再実験を実施、動画と連射撮影をしました。切断条件を再現でき結果は信頼できると確信しました。

以上長々のご説明しましたが、下記長田様のご説明・ご見解を合わせて再検討してみましても、「湯浅実験」が根拠のない、自説の結論に導くためだけのデタラメなものであることが理解でき、湯浅本の「あとがき」に記載された「**これでやっと東壁遭難の登攀についての総括が完結した**」の結論は誤りであると断言してもよいと確信しました。湯浅本は意図的に繰り返しが多く、相当の苦痛を我慢せずしては読み通せないとは思いますが、NITE 様や長田様の実名が何度も引用され、あたかも NITE 様・長田様の絶大なご支援とご承認のもとに実験を行った如しに書かれております。放置すれば将来 NITE 様や長田様の名誉が傷つくことになりかねません。実際ここ数度の往復書簡の中で、私たちが東壁遭難事故・ナイロンザイ

ル事件の实在の関係者の事前の承諾なく出版した非を問うても、湯浅氏は「誰からも事前に記載事項に関して異議や抗議は受けていないので書いて何が悪いか？」と返信でうそぶく始末です。私たちはこれから実験の不正確さ・恣意的結論の出し方など「湯浅実験」について追及していくつもりですが、湯浅氏からは必ずや「NITE 様・長田様のご指示のもとに実施し、出版後も長田様からは何ら特段のご指摘やご異議はなかった」と返信されるのではと危惧いたします。

ご指摘のように湯浅氏は「大きなニュースにして、〈ナイロンザイル事件〉の真実をひっくり返そうとしている」のかも知れませんが、私たちも一般のマスコミに面白おかしく取り上げられるようなことは決して望んでおりませんが、湯浅氏は報道機関のみならず国会図書館をはじめ大学の図書館や山岳関係機関・地元著名人・知人や来院者に寄贈・配布しております。ナイロンザイル事件を正しく理解している人たちがいる間は中日新聞のように記事の掲載を保留し、その後私たちの見解書の内容を理解し掲載を中止してくれていますが、いつ「湯浅本」が独り歩きするか将来的にはどうなるか判りませんので、今できることはしておきたいと思います。石岡先生もナイロンザイル事件を闘う中で、何度も成果を得ながらしっぺ返しを受けた経験から、「相手は隙あらば狙い、いったん認めたことも否定し、元に引き戻そうとする。その都度何度でも正しいものは正しいと主張し、対応していかないといけない」とおっしゃっています。

どうか今一度お考え直しいただき、「湯浅本」の記載内容の間違いをご指摘いただき、訂正を求める書簡をお出しくださるよう重ねてお願い申し上げます。

尚、私のメールに対するご回答の中でのご質問に関しては、下記貴メールに「→赤字」でコメントさせていただきましたのでご参照願います。

今後とも宜しく願いいたします。

水野高司 拝（「石岡繁雄の志を伝える会」、Tel:090-1099-0995）

**From:** 長田 敏 [mailto:nagata-satoshi@nite.go.jp]

**Sent:** Wednesday, August 7, 2019 5:44 PM

**To:** Takashi Mizuno <tnmizuno@hm8.aitai.ne.jp>

**Cc:** 石岡 先生 <adumi@mecha.ne.jp>; 相田 武男様 <ai41tk50@sepia.plala.or.jp>; 前田幸雄様 <maeda-ron-2008@katch.ne.jp>; Ogawa Ryuhei\_Hatsuko 様 <muchin@mecha.ne.jp>

**Subject:** RE: 湯浅実験の検証実験の結果(ご報告とお願い)

石岡繁雄の志を伝える会

水野高司 様

大変ご無沙汰いたしております。

水野様たちが行われた実験、湯浅氏の本記載事項、水野様のご質問につきまして、ご意見、感じたこと等につきましてご連絡させていただきます。

2. ①荷重 3.2Kg まではテグスは切断しない
- ②荷重 3.3Kg でテグスは確保者側で切断する
- ③荷重 3.4Kg 以上ではテグスは墜落者側で切断する
- ④テグスが切断する刃角の位置も微妙であり、本実験ではわずかに 0.1Kg の荷重差で位置が変動し、切れ端の形状も大きく異なる。
- ⑤従って全て「全て確保者側で切断」とは結論付けられない。

さて、標記の件、当会の所有しております「ミニ実験機」を再構成して、「湯浅本 177 頁」に掲載の実験とほぼ同一条件で 0.74mmΦのナイロン製テグスの切断実験を実施してみました。その結果判ったことは以下の通りです（実験の詳細は添付資料をご参照ください）；

一方、「湯浅本 175 頁」には **12Kg では切断せずに、13Kg で全て確保者側で切断**と報告されています。

この結果、湯浅実験が如何にいい加減なものか容易に想定されます。そのうえ湯浅氏が主張する東壁遭難事故の総括が、この誤った実験結果により導き出された可能性があり、私たちは看過できません。→ ・荷重 3.2Kg では何回実験を行ってもテグスは切断しない、荷重 3.3Kg では何回実験を行ってもテグスは確保者側で切断する、荷重 3.4Kg 以上では何回

実験を行ってもテグスは墜落者側で切断する 荷重の違いによって同じ結果になると考えてよいでしょうか。

→ 概ねそうなると思いますが、テグスの切断実験を詳しく論証することが目的ではなく、「湯浅実験」のデタラメさを指摘することが主目的ですのでこれ以上やるつもりはありませんが、湯浅氏が希望すれば再現実験をいつでもお見せできます。

・0.74mmΦのテグスではなく、テグスと同程度の太さになるように調整したナイロンザイルのフィラメント数本で同様の実験を行った場合は、どのような結果になるでしょうか。

→ 湯浅氏がやっていない実験をする予定は今のところありません。

・0.74mmΦのテグスではなく、テグスと同程度の太さになるように調整した麻ザイルの紐で同様の実験を行った場合は、どのような結果になるでしょうか。

→ 湯浅氏がやっていない実験をする予定は今のところありません。

・湯浅氏の実験では、荷重 12Kg、13Kg で実験を行っておられるようですが、水野様たちが行われた実験の荷重 3.2Kg、3.3Kg、3.4Kg となった理由ですが、おそらく、水野様たちの実験機の方が、岩角想定した金属の角が鋭かったのではないかと思います。湯浅氏の実験機では、荷重 3.2Kg、3.3Kg、3.4Kg ぐらいでは切断せず、荷重 12Kg、13Kg にしないと切断しなかったのではないかと思います。なお、荷重が大きい方が、衝撃荷重による発熱量は大きくなると考えられます。

→ ご指摘の通りと思います。

湯浅氏が実験をされる前にそのようにご指導いただけたらと残念に思います。特に刃については国の規定に近いもの（前述の通り、SUS304 は不銹鋼で柔らかく繰り返し実験には不向きです）にするようにご指摘いただけたらと思いました。少なくとも湯浅氏の実験装置は構造的にもとても危険そうで、怪我なくできてよかったと思います。

2. 「湯浅本 243 頁」には「NITE の長田敏の論文を見つけた。それで長田に会って、2 点支点を有する岩角でのナイロンザイル切断実験を指導してもらった。その結果、2 点支点を有する岩角で登攀者が墜落すると、確保者側でナイロンザイルが切断することが判明し、ナイロンザイルについての検証が終了した。これでやっと東壁遭難の登攀についての総括が**完結した**」と明記されています。更に、「同 245 頁」には、「2 つの支点を持つ岩角のどち



ら側でナイロンザイルは切断するののかの実験についてご指導いただきました。「NITE の長田敏氏に深謝いたします」と賛辞が贈られております。そこで下記についてどうしても長田様のご見解をお聞きしたいと存じます。

大変お世話になった NITE 様に今後ご迷惑が及ばないことを念ずるが故、失礼とは存じますが宜しく願いいたします。(湯浅氏は本の中で、「吊り上げ」が石原氏によって行われた結果、五郎氏はバランスを崩して足を滑らせ、その結果墜死した、と示唆しています。つまり石原氏の行為は過失致死事件であり、石岡先生はそれを知りながら隠蔽したとも書いています。これは 2 人に対する重大な名誉棄損であります。このまま放置すれば万一、法廷闘争となった場合、実験を指導し、誤った結論を導き出させた NITE 様もしくは長田様の責任は免れないと危惧いたします)

→ ・「NITE の長田敏の論文」とは、2014 年 10 月 3 日に開催された「あいちサイエンスフェスティバル 2014」説明に使用した「製品事故の原因を探るサイエンス」(<https://www.shigeoishioka.com/new39.html>) の PPT の資料だと思います。

・湯浅氏がコスモスクエアの NITE に奥様と訪ねてこられ、「2 点支点を有する岩角でナイロンザイルはどちらで切れるか？」との質問をされましたので、「2 点支点を有する岩角を想定した実験機を作り、実験をやったらどうか。ナイロンザイルのフィラメント数本で実験を繰り返したらよいのでは。」と回答しました。

→ **ご指摘の通りと思います。4 回も来られたそうですので、湯浅氏が実験をされる前にそのようにご指導いただけたらと残念に思います。**

・湯浅氏に対して「昭和 30 年 1 月に事故が起こった理由は、日本ではナイロンザイルは麻ザイルよりも何倍も強く、ナイロンザイルは切れないと信じていたからである。」「石岡繁雄先生は松の木による実験を行い、鋭いエッジの岩角で弱いことを発見された。これはすばらしいことである。」「石岡繁雄の志を伝える会メンバー」とは、仲良くやってください言いましたところ、それ以降、私に相談には来られなくなりました。

3. 長田様にお尋ねしたきこと；

⑦ 長田様は「湯浅本は全部読んでいない」とおっしゃっていましたが、上記の記載事項はお読みになりましたでしょうか？

→ P243「NITEの長田敏の論文を見つけた・・・」P245「二つの支点を持つ岩角のどちら側でナイロンザイルは切断するかの実験について・・・」P249「長田敏 「あいちサイエンスフェスティバル2014」の講演レジメ・・・」あたりを読みました。

→ お辛いでしょうが是非全文をお読みになることをお勧めします。私たちは苦痛を我慢し手分けして何度も熟読し、全254頁の頁毎に反論すべき記載事項221項目を書きだしました。その内訳は、重複もありますが、・誤記：22項目、・事実誤認：71項目、・独断・推論：126項目、・約束反古：2項目、でした。

⑧ 上記湯浅実験とその結果について NITE 様もしくは長田様はどこまでコミットされているのでしょうか？

→ 「2点支点を有する岩角を想定した実験機を作り、実験をやったらどうか。ナイロンザイルのフィラメント数本で実験を繰り返したらよいのでは。」「昭和30年1月に事故が起こった理由は、日本ではナイロンザイルは麻ザイルよりも何倍も強く、ナイロンザイルは切れないと信じていたからである。」「石岡繁雄先生は松の木による実験を行い、鋭いエッジの岩角で弱いことを発見された。これはすばらしいことである。」「消安法の特定制品に登山用ロープが追加され、それ以降、岩角によるナイロンザイルの事故はほとんど発生していない。」と説明しました。

→ 是非ともこのことを抗議レターにお書きいただきたいと存じます。

⑨ ナイロン製テグスとナイロンロープでは切断のメカニズムも挙動もかなり異なることを、私たちの実験では確認しておりますが、どのような根拠でテグス実験を勧められたのでしょうか？

→ 「テグス実験」ではなく、「ナイロンザイルのフィラメント数本で実験をやったらどうか」と説明しました。

→ 是非ともこのことを抗議レターにお書きいただきたいと存じます。

⑩ 「湯浅本175頁」後ろ2行に「水玉形状（チューリップ形成）が見られた」と記載ありますが、その確認はNITE（長田様）がされたのか、湯浅氏の独断なののでしょうか？

→ 私は、水玉形状（チューリップ形成）の確認はしていません。

→ 是非ともこのことを抗議レターにお書きいただきたいと存じます。

湯浅氏は「製品事故の原因を探るサイエンス」

(<https://www.shigeoishioka.com/new39.html>) の P58 を見ているので、  
ご自分で確認されたものと思います。

「石岡繁雄の志を伝える会メンバー」とは、仲良くやってください言いましたところ、それ以降、私に相談には来られなくなりました。

- ⑪ 弊会の実験結果から言えることは、湯浅実験の錘は過剰で、実験用の岩角がいい加減であると推定されること。切断に必要な荷重を大幅に超過する錘で切断して、ナイロン特有の溶融時のチューリップ模様を無理に作ったのでは？と推定されますが、長田様はどのように評価されますでしょうか？

→ 荷重 12Kg、13Kg であれば、衝撃荷重による発熱量は大きくなると考えられますので、水玉形状（チューリップ形成）ができるのではないかと思います。

→ きちんとした実験装置を作り、可能ならば「低荷重」での切断限界を再実験で求めるようご指導願います。

- ⑫ 6月18日のお電話でのお願いの際、長田様より「湯浅氏とは穏やかに、諭すように話し合いをしてください。どうしても湯浅氏が話し合いに乗らない場合は私から湯浅氏に手紙を出してもよい」とご返事いただきました。湯浅氏はまるで「実験は長田様のご指導で行った」かの印象を与える記載をしていますが、「記述内容は虚偽である」等、湯浅氏に本の内容について抗議の申入れをされているうお気持ちはおありでしょうか？

→ 先日（8/6）、電話で、石岡あずみ様、水野様に説明させていただきましたが、湯浅氏の気持ちは、大きなニュースにして、「ナイロンザイル事件」の真実をひっくり返そうとしているように感じます。「石岡繁雄の志を伝える会メンバー」が抗議、訴訟などしないで、「氷壁・ナイロンザイル事件の真実」をベースにした社会のためのセミナーなどをしたらよいと思います。セミナーなどでは、次のコメントを発したらよいと思います。

→ 私たちは間違いは間違いであると指摘をしたいと思います。湯浅氏ご本人はもちろん、配布先にもきちんと説明したいと思っております。そうしなければ石岡先生の名誉は守れません。晩年（ご逝去の4か月前）に60年前の出来事を正確に思い出せるような状況

ではない、しかもいくつかの病（アルツハイマー症も含め）を抱えて入退院を繰り返していた先生を、高井氏と湯浅氏は畳みかけるように詰問し、「先生はこうこうのことを認めた」と主張し、鬼の首を取ったように湯浅本に記載した事実は人道に反する行為です。とても教え子が恩師に対する態度とは思えない、ましてや医療の責任者である湯浅氏の常軌を逸した態度は、先生にも遺族の方にも大きな心の痛手を与えたに違いなく、私は許すことはできません。しかも、「今日は水に流すために来た。もうこれ以上言うことは無いので今後一切言いません」と先生と遺族に約束しておきながら、事前に何の連絡もなく、間違いだらけの本を出版し、「日本山岳界に記録を残したい」「言いたいことを書いて何が悪い」と言い逃れや居直りを言う湯浅氏のような人には、関係者がきちんと指摘しないといけないと思います。長田様は関係者のおひとりとして是非とも叱責のクレームレターを湯浅氏にお出しされるよう繰り返し重ねてお願い申し上げます。

- ・昭和30年1月に事故が起こった理由は、日本ではナイロンザイルは麻ザイルよりも何倍も強く、ナイロンザイルは切れないと信じていたからである。

- ・石岡繁雄先生は松の木による実験を行い、鋭いエッジの岩角で弱いことを発見された。

- ・石岡繁雄先生の功績で、消安法の特定製品に登山用ロープが追加され、それ以降、岩角によるナイロンザイルの事故はほとんど発生していない。

水野様たちが今後行われる実験で、ナイロンザイルは、何故、岩角で切れやすいのか、説明資料を作成し、必要とされる方がおられたら配布したらどうかと思います。

今後とも、よろしくお願いいたします。

何とぞ、よろしくお願いいたします。